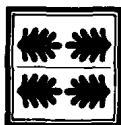


白い鮭

しやち

西村寿行





講談社文庫

定価480円

しろ しやち
白い鯨

にしむらしゅこう
西村寿行

昭和57年10月15日第1刷発行

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 凸版印刷株式会社

印 刷 凸版印刷株式会社

製 本 株式会社若林製本工場

© Juko Nishimura 1982

Printed in Japan

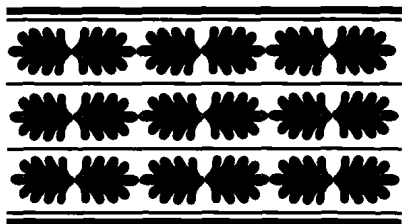
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り
ください。送料小社負担にてお取替えます。

ISBN4-06-136247-X (0)

社文庫

白い鯨

西村寿行



講談社

目次

第1章	老鷺 ろうわう の死
第2章	沈黙の男
第3章	黒島の戦い
第4章	仙石文蔵の怒り
第5章	凍土へ
第6章	氷の塔

三五〇	二五六	一八三	一三〇	六四	七
-----	-----	-----	-----	----	---

白
い
鯨

第1章 老鷺ろうおうの死

春が過ぎ去っても啼うぐいている鷺いすを、老鷺という。

1

八十を幾つか過ぎたげな老人であった。

老人はソフト帽を目深まぶかにかぶっていた。薄い茶色のサングラスをかけている。目の光はみえない。荷物は小さなボストンバッグ一つだけだった。

列車がホームに滑り込んできた。

寝台特急ゆうづるであった。

ゆうづるは上野発の最終寝台特急であった。

老人はおちついた足取りでゆうづるに乗り込んだ。

ゆうづるには平野博行が乗っていた。

ゆうづるが一ノ関を出たのは午前五時四十八分であった。発車して間もなく、平野はトイレに立った。

トイレで平野は老人に出遇った。老人は平野をみて、ほんのわずかの間、足を停めた。平野も同じだった。足をとめて、老人を見守った。

老人は何事もなかったように、歩き去った。

「もし」

平野はあわてて、後を追った。

「槐島先生ではありませんか」

小柄な背中に、声をかけた。

「いいえ、ちがいます」

老人は振り返らずに、答えた。

平野は、老人が一号車に消えるのを見守った。

——槐島佐吉だ。

平野は胸中につぶやいていた。

槐島佐吉は衆議院議員である。それだけではない。内閣総理大臣を二期つとめている。保守党の大長老であった。日本の黒幕第一人者として、内外に知れ渡っている。

平野は槐島と同じ山口県人であった。市会議員をつとめている。槐島とは懇意とまではいえないが、それに近い間柄であった。見誤ることはなかった。まちがいなく、槐島佐吉であった。通りかかった専務車掌を、平野は呼びとめた。

「一号車に槐島先生が乗っておられるのを、ご存じですか」
身分を明かして、平野は訊いた。

「槐島先生が？ いえ、存じていません」

「まちがひなく、槐島先生だ。わたしのみたところ、秘書もボディガードもない。何か理由があつてのお忍びらしいが、万一、何か事故が起きたら、国鉄の責任になりかねませんよ。鉄道公安官に護衛させるべきではありませんか」

「わかりました。至急、手配いたします」

うなずいて、車掌は足早に去った。

平野はトイレに行くことを忘れていた。不可解な思いが胸を塞いでいた。首相経験者にはかならず護衛がつく。どこに行くにも、二人の護衛官が従う。槐島が旅行に出るのに護衛官なしというのは、想像できない。

それだけではない。槐島がなぜ、最終寝台車に乗っているのかが、謎であつた。ゆうづるは青森行きだ。青森まで行くのに槐島が最終寝台便を用いることは、あり得ないという気がする。飛行便を利用しなければならぬ。夜行列車を利用する暇などは、槐島にはないはずであつた。首相を退いてから十余年になるが、いまでも毎日が超過密のスケジュールだ。

——それとも、人ちがいかな。

いやと、平野は否定した。人ちがいなら、平野の貌をみるわけではない。足を停めてわずかの間だが平野をみたあの貌には、驚きがあつた。

平野は、ぼんやりと空間をみていた。

鉄道公安官が二人、一号車に入った。専務車掌が一緒だつた。検札に名をかりて、槐島をたし

かめるてはずになっていた。

二十八人の客がいた。二十七人までは検札のときに貌をみせた。貌をみせない客が一人だけいた。A寝台下段の客だった。キップだけを差し出した。

「大変、失礼ですが、槐島先生ではございませんか。わたしは専務車掌でございます。乗客から連絡をいただいたもので……」

「ちがいます。よく、まちがわれるんです」

貌はカーテンの陰に隠れていた。カーテンを引いてたしかめるわけにはいかない。専務車掌は諦めて、外に出た。

「どうする？」

公安官に訊いた。

「ちがうというのだから、ちがうのだろう」

公安官はもっとも常識的な判断を下した。

ゆうづるが水沢に着いたのは午前六時八分であった。

一号車A寝台下段の老人は、水沢に下りた。

老人はうつ向いて改札口を出た。キップを受けとった駅員は不審そうに老人を振り返った。キップの行先は北海道の小樽駅となっていた。声をかけようかと思ったが、そのときには距離が開きすぎていた。

老人はタクシーに乗った。

「盛岡へ行ってくれんか」

「東北自動車道を通りますか」

「ああ、そうしてくれ」

老人が運転手と交^かわした会話は、それだけだった。

運転手は車を走らせながら、バックミラーで客をみた。帽子を目深にかむっている。その上、サングラスだ。どこかでみた貌だと思ったが、思い出せなかった。田舎の人間ではなかった。小柄な体だが、どういのか、重量感がある。ものいいにも、洗練されたものがあつた。

水沢から盛岡南インターまでは三十分ほどの距離だ。途中に自動車事故があつた。死人が出たらしい気配だった。

「とばすから、いけないですよ」

運転手が話しかけたが、老人は答えなかった。

老人が口をきいたのは矢巾サーブエリアに近づいたときであつた。寄つてほしいという。それだけであつた。運転手はうなずいて、車をサーブエリアに着けた。

老人が車を下りてじきに、パトカーが入ってきた。事故現場にいたパトカーであつた。

パトカーには高村重久が乗っていた。高村は勇退を一、二年後にひかえた巡査部長だった。一通りサーブエリアを見渡して、行くかと、若い部下に声をかけた。異状なし——そう判断した。

九月の空は早朝から晴れ渡っていた。まぶしいほどの陽光が注いでいる。

「おい、待て」

動き出したパトカーを、高村は停めさせた。

「あれは、槐島佐吉ではないか」

タクシーに戻る老人を指した。

「似てますね」

「似ているのではない。あれは槐島だ」

高村はパトカーを下りた。

槐島の特徴のある貌を知らぬ者はいない。何年間かは、テレビ、新聞が連日のように槐島を登場させていた。どこに黒子^{くろこ}があつて笑うとどんな貌になるのかまで、たいていの者は熟知している。見誤るはずはなかった。

「槐島先生。高速道路警察隊巡查部長の高村です。どちらまで参られますか」

高村は敬礼をして、訊いた。

「わたしは、中村という者です。失礼」

老人は冷たい口調で答えて、タクシーに乗った。

高村は運転手に行く先を訊いた。盛岡だという。

「先導いたします」

車中の槐島に告げて、高村はパトカーに乗った。

槐島なのは、はつきりしていた。何か事情がある。護衛官がいなのはそのためだ。黒子まで同じ位置にある。他人の空似^{そっくり}では絶対になかった。

高村は無線を把^とった。槐島が護衛官なしでタクシーに乗っている。先導すると、告げた。

パトカーはルーフの赤色ランプをつけて、勢いよく体を乗り出した。

タクシーが、それにつづいた。

それを見守っていた男があった。

東北新聞社会部に籍をおく羽場健二であった。羽場も交通事故現場からの帰りであった。いちぶ始終を見守っていた。

羽場はタクシーの後に、自分の車をつけた。

無線のチャンネルを警察無線の周波数に切り替えた。警察回り記者のたいていは、警察無線を傍受^{ぼうじゆ}できる無線を備えている。

高村と盛岡署の交信が入った。

羽場は思いがけぬ拾いものに胸をふくらませていた。タクシーの客が槐島佐吉なのは、はつきりしていた。槐島ほどの大物が従者や護衛官なしで、しかもタクシーを雇ってここらあたりにあらわれることは、ふつうは、あり得ない。あるとしたら、隠された事情がなければならぬ。

槐島は戦後政界を牛耳った大物だ。いまでも隠然^{いんぜん}たる勢力を持っている。政界を揺る^ゆがすような汚職発覚のたびに、槐島の名前が新聞に出る。だが、槐島が検察の手に落ちたことは、かつてない。その巧妙さと、底知れない肚黒さは、独得のものであった。並ぶものがなかった。

槐島は変装している。よほどの事情を抱えているものとみるのが至当であった。

追跡意欲が昂^{あか}ぶって、胸を締めつけていた。

十分ほどたって、ふたたび、交信がはじまった。

「高速盛岡三号。こちら、県警本部警備局だ」

「高速盛岡三号です」

「なにをねぼけておる。警察庁警備局に問い合わせてみた。槐島佐吉は湯河原の自宅にいる。昨日から風邪で臥せっておるそうだ。きみは、そこらへんのじいさんを先導しているのだ。いい加減な話を持ち込むな」

なかば、怒声であった。

「しかし……」

「しかし、ヘチマもない。もっと、頭を使え」

それで、交信は終わった。

羽場は、パトカーをみていた。パトカーは恥ずかしそうに赤色灯を消した。そして、小さく尻を振って、猛スピードで逃げ去った。

羽場は、苦笑した。

ヘチマの頭かと、つぶやいた。タクシーのリヤウインドウにみえる帽子頭は、ヘチマではなかった。おそるべき記憶を詰め込んだ頭だ。脳波さえ洩らさぬように黒い布で包み込んだ、頭だ。警察庁の返答を、羽場は鵜呑みにはしない。目の前の頭が槐島のものなら、警察庁はこのことを承知しているはずであった。槐島の全行動は警察庁に監視されていなければならぬ。

羽場は無線を把った。社会部デスクを呼び出した。

「ちょっと、おもしろいものが見つかった。また、連絡する」

それだけいって、切った。

事実を告げると、記者が群がり寄る。槐島は目的物か目的場所に向かうことを断念せざるを得

なくなる。そんなおろかなことにはさせたくない。

タクシーは盛岡南インターで下りた。

まっすぐ、市街部に向かっていく。

やがて、盛岡駅に着いた。

槐島は駅に下りた。

羽場も車を捨てた。槐島の乗る列車を突きとめさえすれば、打つてはある。

だが、槐島はじきに雑踏にまぎれて出てきた。客待ちしていた盛岡ナンバーのタクシーに乗った。

——そういうことかい。

つぶやいて、羽場は、車に乗った。

タクシーは、国道4号線・陸羽街道を北に向かった。国道は十和田市から青森市に通じている。

無線は、警察の周波数に合わせてあったが、あれっきり、槐島のことについての交信は入らなかった。

槐島佐吉が青森市に入ったのは、午後二時過ぎであった。

槐島は途中の十和田市でまた、タクシーを乗り替えていた。

槐島が青森駅近くのレストランに入ったのを見届けて、羽場は車を駐車場に預けた。そのときには、羽場は徹底追跡の肚を決めていた。槐島は二度もタクシーを乗り替えている。ただごと